

動物実験に関する現況調査票

滋賀医科大学

平成 28 年 6 月

I. 動物実験に関する組織

機関長	職名 学長	氏名 塩田 浩平
事務担当者	職名 研究協力課研究協力係・専門職員	氏名 廣田 智子
同 連絡先	TEL 077-548-2013	FAX 077-548-2086
		e-mail; hqkenkyu@belle.shiga-med.ac.jp
動物実験 委員会委員長	職名 副学長	氏名 堀池 喜八郎
同 委員	職名 教授	氏名 小笠原 一誠
同 委員	職名 教授	氏名 依馬 正次
同 委員	職名 教授	氏名 等 誠司
同 委員	職名 教授	氏名 宇田川 潤
同 委員	職名 教授	氏名 野崎 和彦
同 委員	職名 教授	氏名 安藤 朗
同 委員	職名 教授	氏名 森川 茂廣
同 委員	職名 教授	氏名 室寺 義仁
同 委員	職名 准教授	氏名 中村 紳一郎

委員の数に応じて、表の行を増やしてください。

II. 機関における動物実験の概要

1. 動物実験を行う主たる研究分野

- 医歯薬学分野 畜産・獣医学分野
 生物科学分野 理工学分野
 その他（ ）

2. 年度ごとに使用した実験動物の種類と概数

動物種	概 数				
	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
マウス	11,018	10,616	12,590	12,702	13,534
ラット	1,469	1,295	1,438	1,344	1,300
スナネズミ	0	0	20	12	0
モルモット	90	76	79	108	136
ハムスター	0	0	0	0	0
ウサギ	405	159	205	96	73
イヌ	68	33	13	10	15
カニクイザル	60	92	105	113	124
ニホンザル	3	1	0	1	0
アカゲザル	0	0	0	0	0
ブタ	10	5	12	9	11

カエル	0	0	0	0	0
-----	---	---	---	---	---

3. 年度ごとの承認された動物実験計画数

動物実験計画数	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
	104件	109件	130件	126件	116件

4. 年度ごとの動物実験に関する教育訓練の受講者数

教育訓練受講者数	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
	150人	138人	161人	226人	259人

5. 実験動物飼養保管施設の現況

施設の名称	管理者の職・氏名	実験動物管理者の職・氏名（関連資格・経験年数）	動物種	最大飼養頭数（概数）
動物生命科学センター（旧棟）	センター長・小笠原一誠 教授・依馬正次	・准教授・中村紳一朗（獣医師・獣医病理学専門家・22年） ・技術専門職員・土屋英明（実験動物技術指導員・27年）	マウス	13,000
			ラット	1,932
			スナネズミ	144
			モルモット	48
			ウサギ	96
			イヌ	58
			ブタ	10
			ニホンザル	17
			アカゲザル	17
			カニクイザル	132
動物生命科学センター（新棟）	センター長・小笠原一誠 教授・依馬正次	・准教授・中村紳一朗（獣医師・獣医病理学専門家・22年） ・技術専門職員・土屋英明（実験動物技術指導員・27年）	カニクイザル	740

6. 特記事項

（動物実験に関連した、機関の特徴や特殊事情）

<ul style="list-style-type: none"> 動物実験委員会は、サル以外のすべての実験動物を対象とした「基礎」、サルを対象とした「サル」、及び感染動物実験を対象とした「感染」の3種の教育訓練を実施し、講義と資格認定試験、さらに「サル」ではウェットハンドが行われている。 動物実験委員会は動物実験の3Rsに基づき、計画書に対する厳正な審査を行っている。 動物生命科学センターには、医科学教育、基礎・応用研究のために必要とされる主な動物種を飼育・維持・管理できる体制が整っている。 学内外の利用者によるサル類を用いた研究が盛んで、そのための支援体制が整えられている。サル類の計画的人工繁殖がルーチンに行われているのも特徴である。
--

- ・農林水産省からサル類の輸入法定検疫施設の許可を、我が国の大学では唯一、取得している。
- ・げっ歯類、サル類ともに、近年増加している組換えベクター実験などに対応すべく P2 レベル感染実験動物施設に加え、新興再興感染症実験（高病原性鳥インフルエンザ感染実験）に対応すべく P3 レベルの感染実験が行える飼育室（ABSL2 及び ABSL3）を保有している。
- ・トリインフルエンザウイルスの保管施設と実験感染、ブタ飼育施設は家畜伝染病予防法に従っている。
- ・ミニブタ取り扱い時の不十分な麻酔処置が原因で、制御困難な状態から発した声が、処置室周囲にいた職員に不快感を与え、学内の問題となった。動物実験委員会、動物実験施設管理者および実験責任者で原因を検討したところ、筋肉内注射とすべき所、穿刺が不十分で皮下までしか達しておらず、麻酔効果が十分に発揮されなかったことが明らかになった。動物実験施設管理者および施設職員はミニブタ生産業者が開催する取り扱い講習会を受講、適切な扱い方を再確認するとともに、受講後、その情報を実験責任者と共有した。また動物実験委員長から実験責任者への注意勧告がなされた。